

Rikkyo University

From the Selected Works of Kayoko Takeda 武田珂代子

2009

CETRA、Target 誌20周年記念国際会議： The Known Unknowns of Translation Studies の 報告

Kayoko Takeda, *Monterey Institute of International Studies*

CETRA 『Target』誌 20 周年記念国際会議
The Known Unknowns of Translation Studies の報告

武田珂代子

(モントレー国際大学)

On the occasion of the 20th anniversary of CETRA and Target, an international conference titled The Known Unknowns of Translation Studies was held at Katholieke Universiteit Leuven in Belgium on August 28-29, 2009. This conference review presents a summary of the talks given by the keynote speakers (past CETRA professors) and brief comments by the author.

2009 年 8 月 28 日－29 日にベルギーのルーヴェン大学で CETRA (Centre for Translation Studies) と翻訳通訳研究の学術誌『Target』の 20 周年を記念して、The Known Unknowns of Translation Studies と題する国際会議が開催された。CETRA は 1989 年に José Lambert が創設した夏季研修プログラムで、毎年世界中から集まる博士課程の学生や若手の研究者を対象に、翻訳通訳学の著名な研究者が 2 週間の集中講義・個人指導を行うものである。現在では類似のプログラム、Translation Research Summer Program が英国と香港で運営され、大学院生による研究発表の場も世界各地で増えてきているが、Lambert の革新的な着想とリーダーシップのもと、20 年間地道に続けられてきた CETRA が翻訳通訳学の発展に果たした役割は大きい。指導に当たるのは学界の重鎮たちだが、毎年 Chair Professor が任命され、その Chair を中心にしたプログラムが組まれる。CETRA の Chair に選ばれることは翻訳通訳学界における名誉ある大きな到達点であることは広く認識されている。今年の Chair は香港バプティスト大学の Martha Cheung で、研修生は 24 名。日本からも 4 名が参加した。(詳細は河原会員の報告を参照。) 過去の Chair は以下の通りで、その研究アプローチ、専門分野、地域の多様さから CETRA がいかに開放的で進歩的なプログラムかがうかがえる。Gideon Toury (1989)、Hans Vermeer (1990)、Susan Bassnett (1991)、Albrecht Neubert (1992)、Daniel Gile (1993)、Mary Snell-Hornby (1994)、André Lefevere (1995)、Anthony Pym (1996)、Yves Gambier (1997)、Lawrence Venuti (1998)、Andrew Chesterman (1999)、Christiane Nord (2000)、Mona Baker (2001)、Maria Tymoczko (2002)、Ian Mason (2003)、Michael Cronin (2004)、Daniel Simeoni (2005)、Harish Trivedi (2006)、Miriam Shlesinger (2007)、Kirsten Malmkjaer (2008)。

一方、『Target』誌は 1989 年に Toury が中心となって創刊した翻訳通訳学の学術誌である。『Target』誌の革新性は、それまで主流だった翻訳の言語学的分析や等価性の議論に目を向けるのではなく、目

標言語・文化に焦点をおいた記述的研究、さらに社会文化的アプローチを推進したことで、現在に至るまで最も質の高い翻訳通訳学術誌の一つという地位を守り続けている。

今回の会議では翻訳通訳学の発展に多大な貢献をしてきた CETRA と『Target』の 20 周年を記念して、過去の CETRA Chair のうち、Bassnett、Gile、Snell-Hornby、Pym、Gambier、Chesterman、Nord、Tymoczko、Trivedi、Shlesinger、Malmkjaer が翻訳通訳学において今後取り組むべきあるいは取り組みが予想される項目について発表し、ディスカッションが行われた。(発表が予定されていた Vermeer と Cronin は欠席。) CETRA 卒業生をはじめとした参加者数は約 120 名。日本関係者は筆者も含めて 6 名。以下はこの会議の報告および筆者による所感である。

1. Lambert の開会挨拶

Lambert 発言の要旨は以下の通り。「翻訳についての議論は当初、文学研究の枠組み内のものだったが、1976 年に Holms がここルーヴェンで Translation Studies という名称を初めて使用し、学問分野としての翻訳研究が認識され始めてから、多くの進展があった。今や翻訳研究の PhD プログラムは世界中に広がり、文献・博士論文も豊富にあり、翻訳学は「成人期」にある。「成人」になると保守的になることもあるが、これからも開放性を保ち、学際性を推進することは重要。Snell-Hornby による「統合的アプローチ」は最も画期的な出来事の一つだった。現在のトレンドの一つとして「社会学的転回」があるが、学問としての翻訳学のポジション(文化、社会、学界における)を常に意識すべきである。翻訳学が世界的に広がっているが、自国語をめぐる事象に集中しすぎると盲点が出てくることもある。環境に縛られず、自分たちは一体何を研究しているのか大局的な定義づけが必要。」最後に、ベルギーという多言語社会の事情のためか、大学内での言語政策についての議論をもっとすべきだという発言もあった。翻訳学誕生の生き証人による言葉は一つ一つが重く、心に響くものだった。

2. Chesterman “In search of significance”

正統的な理論家として知られる Chesterman だが、発表内容は「意義のある」研究をいかに実行しているかだった。以下、要約。「翻訳学内外で人々の考えや行動に影響を与えられるような意義ある研究とは何か。まず、意義のある新しい事実(歴史的、統計的、地域的)を提供すること。次に、翻訳の実践によって意義深い問題提起をし解決法を示すこと。現状を認識し、将来望まれる状況とは何か、その状況に到達するための最善の方法は何か、その方法をどう実施するかを意識すべき。最後に、理論上の課題がある。翻訳学内で用語の統一が行われていない、様々な概念や理論的アプローチが細分化したような状況では翻訳学の飛躍的発展は難しい。全てを包含するような融合的議論 (consilience argument) が必要かも。Unknown unknowns を知るためには既存の枠組みから飛び出し、偶然を利用し、方向転換を恐れず、隠れた想定・新分野を試し、プロジェクトではなく人に資金援助をすることなどが重要。」

Chesterman には大いに同感する。我々研究者が志すべきは、翻訳通訳学、周辺の学問、翻訳通訳実務、ひいては社会にインパクトを与えられるような意義ある研究だ。

3. Pym “Translating as risk-management”

翻訳学の現在における三つの重要な事象を提示し、それを背景として「リスク管理としての翻訳」という独自の理論を説明。最後は過去 20 年における自らの研究活動の自己批判で閉めた。以下、要約。「注目すべきこと三点。第一に機械翻訳とデータベースを利用する Google Translate の出現は革命的である。プロではない翻訳者が参加して生み出す翻訳はエラーをとまなうハイリスクな翻訳の実践。研究者はこの事象およびそれが翻訳者養成に及ぼす影響について考えるべき。第二に翻訳学は脱構築やポストコロニアルの枠組みで「意味」の不確定性を唱えるパラダイムに対して十分な対応ができていない。一つの解決法は確率論的(probabilistic)アプローチで、リスク管理的視点から考えることができる。第三にコンテキスト化の問題。翻訳は異文化間コミュニケーションの一つとして見るべきで、その中で翻訳特有の事象は何かを研究すべき。コミュニケーションからの視点を持つと、仲介者、複雑性を削減するための信用、リスク管理などの検討につながる。以上に照らして翻訳におけるリスク管理を論じることができる。まず、翻訳エラーの可能性を低くするためのリスク管理、コミュニケーションの成功のためには、参与者による協力、相互恩恵、倫理が必要となる。第二に翻訳対象のテキスト分析ではハイリスク部分とローリスク部分を見極めると、翻訳者のリソース配分が効率的になる。第三にリスク削減のための他の様々な方略を研究することもできる。また、これからの課題として、既存のデータを異なる理論の枠組み(例えばリスク管理)を用いて新たな解釈を試みることができるのでないか。翻訳学も学問としてある程度のリスクをとらなければ大きな「報酬」を得ることはできない。」Pym が自己批判の中で触れた、限られた部数で高価な書籍しか刊行できない出版社に頼り、研究成果がより広範な読者層に届いていないことは、学界全体の課題である。翻訳研究がテクノロジーや「ファン翻訳者」の問題を軽視してきたことについては、同じことが通訳研究(通訳の場合は「ファン」ではなく natural interpreters の類)にも当てはまるだろう。また、Pym は翻訳学会の限定性を指摘し、自分も academic village から global village に飛び出すべきだと述べていた。「文化翻訳」を包含するつもりかと確認をとったところ、それはないと返事だった。

4. Malmkjaer “Translation Theory and its Concepts”

翻訳理論一般についての課題および翻訳の普遍的特性 (universals)を探求する上での新視点の提案を含む発表。以下、要約。「翻訳学においては様々な概念間の相互関係を忘れた議論がなされている。理論は事実の前に存在するもので、様々な仮説間での競争によって試される。理論は進歩的で一貫性を持たねばならず、理論が事実によって裏付けられ科学は成熟する。翻訳の普遍的特徴を求める研究は従来からコーパスを基にテキスト中の言語的特徴に注目してきたが、翻訳の産出物ではなくプロセスに目を向けるべき。例えば、翻訳者はまず直訳的な訳出をした後にコンテキストに照らした訳に直し

ていくというプロセスなど。認知的側面や起点テキストの干渉を重視すべき。翻訳における創造性には認知的制約が影響する。」Malmkjaer 自身が本発表を初期的なものだと断っていたように、やや消化不良気味の内容だった。しかし、翻訳学における諸概念間の関係について議論が十分に行われていないことは確かである。また、翻訳における認知的側面、翻訳のプロセスの重視は最近のトレンドでもある。しかし、翻訳の普遍的特性については、そのようなものがそもそもありうるのかと疑問を投げかける研究者も多い。この点も議論を重ねるべきなのだろう。

5. Tymoczko “The Neurophysiology of Translation”

ここ数年翻訳学の脱西洋化や翻訳者のエンパワメントを唱えてきた Tymoczko だが、今回は神経生理学の動向が翻訳にどう影響するか、というこれまでと全く異なるトピックの発表だった。以下、要約。「神経生理学に関する最近の記事によると、無意識、視覚、記憶、ミラーニューロンなどの研究が言語やバイリンガリズムという枠組みで行われている。翻訳行為も神経生理学の対象になることが予想され、翻訳研究者たちがそうした研究チームに加わるのが重要。神経生理学の発展によって現在未知の項目も数十年後には解明されるかもしれない、それによって翻訳者養成法も影響を受けるだろう。」初期の通訳研究においては主に会議通訳の認知的側面に焦点がおかれ、認知心理学的アプローチが試みられたが、継続的な発展が見られなかった。テクノロジーの進歩もあり、今、翻訳研究において認知的側面に関心が高まっているが、神経生理学者とのコラボレーションの可能性、将来性については疑問を投げかける陣営もいることだろう。

6. Nord “Quo vadis, functional translatology?”

ドイツ語圏のスコポス理論・機能主義パラダイムの歴史を振りかえる発表。以下、要約。「ドイツ語圏においては30年前から Vermeer、Reissらがスコポス・機能主義的翻訳理論を展開してきた。その沿革について英語で書かれた文献には不正確な説明もある。ドイツ語圏外でも機能主義的翻訳研究が広がったが、特に、翻訳者養成、テキストタイプの分類、職業としての翻訳という側面で貢献をしてきた。」CETRA や『Target』が始まる10年も前からドイツ語圏で翻訳研究が行われていたことをアピールする目的もあったのか、過去を振り返る発表で、これからの展望については明確な情報の提供はなかった。参加者から「スコポス理論で翻訳に関する事象を全て説明できるのか?」、「スコポスでは仮説を立てることができないのではないのか?」といったコメントがあった。

7. Snell-Hornby “Globish or multilingual: Translation Studies, quo vadis?”

司会者に Nord とともに翻訳学会の「Grand Ladies」と紹介された Snell-Hornby は「統合アプローチ」や「学際性」を唱えた翻訳研究のキーパーソンとして過去を振り返るのではなく、世の中に氾濫する劣悪な英語に焦点をおいた発言をした。以下、要約。「グローバル化が進み、ビジネスだけでなく学問の世界

でも英語が支配的言語になった。その中で Globish と呼ばれる国際化された英語が使われるようになったが、翻訳研究者としては、翻訳テキストで使われる Globish とともに、翻訳学の学会や論文で使用される英語の性質(学会の社会学、倫理、多様性の尊重などの視点から)についても考察すべきではないか。」「嘆き」ともとられかねない発表だった。ポストコロニアルのインド人スピーカーからは「意識的にインドの言語の構造を英語に取り入れるのは植民地言語に対する自分たちの応答だ」との発言があり、Snell-Hornby もポストコロニアル的異種混淆性は自分も認識していると述べた。

8. Toury および編集関係者による『Target』誌についてのコメント

Toury が『Target』誌の歴史について説明。翻訳研究を一つの学術分野として確立するためには学会誌が必要との考えから 20 年前に創刊。起点テキストと目標テキストの比較という従来のアプローチではなく、目標文化・言語に焦点を置くという革新的な姿勢が名前に表れている。これまで掲載された論文の多くはドイツ、英国、ベルギー、フランスなどからのものだが、最近ではスペインと中国からの投稿が一番多いという。スタイル編集者、書評担当者からもそれぞれの挑戦課題などについてコメントがあった。Toury 自身のコメントにあったが「A クラス」の学術誌という地位を保ち続けている『Target』誌には質の高い厳選された論文が掲載されている。流通地域の拡大によってより多くの読者に届くことを願う。

9. Bassnett “Translation and Life Writing”

「Translation Studies」という言葉の発祥の場とされている、1976 年ルーヴェンで開かれた会議「Literature and Translation」に参加した自分の経験から今日に至るまでの翻訳学の発展を振り返り、さらなる成長のための課題について発表。以下、要約。「博士号を取得したばかりの比較文学研究者だった自分にとって 1976 年の会議、その 2 年後に出版された会議録はまさにエピファニーとなった。Holms の『Names and Nature of Translation Studies』、Even-Zohar による多元システム論、Lefevre による『Manifest』などが結節点となって翻訳を学問の対象として体系的に研究することが始まり、それからの発展は「サクセスストーリー」と言われている。しかし、自分たちの学問分野を確立することにあまりに執心しすぎて、内向きになっているのではないか。限られたコミュニケーションチャンネルでは、他分野へのインパクトも生まれない。比較文学や文学研究では今「翻訳」ブームが起こっているが、我々がこの 30 年間取り組んできたことは完全に無視されている。新しいコミュニケーションチャンネルを使い、他分野の専門家と共同研究を行い、翻訳研究を「売り込む」ことが必要。それによって翻訳学が試され、さらなる成功の可能性が出てくる。」33 年前の会議の様子が目に浮かぶような感動的な話だった。コミュニケーションについて研究している専門家にもかかわらず、自分たちの研究を外の世界にうまく伝達できていないという指摘は翻訳通訳研究者の多くが取り組むべき課題だろう。

10. Trivedi “Translation and World Literature”

ポストコロニアル的視点から文学・翻訳を研究する Trivedi は「文化翻訳 (Cultural Translation)」がブームになり、「言語・言語的要因が欠損した翻訳論」にも関わらず翻訳研究を侵食していることに懸念を表明してきたが、今回は「世界文学 (World Literature)」批判を語った。以下、要約。「世界文学という概念は翻訳なしには成立しないが、翻訳に対する注意は不十分である。英語のみで存在する世界文学とは一体何なのか、どの言語からどの言語に文学が翻訳されてきているかを検討する必要がある。また、世界文学はその編纂者の世界観に依存しているという問題点がある。例えば、Casanova にはフランス語覇権主義が見られ、「フランス語を理解する人」対「翻訳が必要な人」という構図を打ち立てている。文化翻訳に関してもそうだが、まず翻訳とは何かを定義し、研究対象の区別をしなければならない。」Trivedi はこれまで文化翻訳と戦ってきたが、苦戦続きだという。翻訳研究者は文化翻訳を一時的なブームだとし、無視するのではなく、関与・対峙を試みることによって自らの学問のアイデンティティーを固めていけるのではないかと考える。

11. Shlesinger “‘Interpretese’: What corpus-based studies may tell us about the unknowns of interpreting”

世界における通訳研究の最先端を走る Shlesinger は、自身に取り組んでいる通訳コーパスを基にした研究の経過報告、課題と可能性を発表。以下、要約。「通訳コーパスを利用して、通訳のプロセスおよび産出物について新たな発見が生まれるのではないかと。問題点は、データをどう選択・調整するか、韻律などをどうトランスクリプションに反映させるかなど。翻訳と通訳、通訳と自然発話、方向性・性別・スピード・レジスターの違いに基づく様々な通訳間の比較をする可能性がある。現在、同じ通訳者が同じスピーチに対して行う通訳と翻訳のコーパスを構築中。解決すべき問題は多いが、可能性大の通訳研究方法である。」他の学問分野、通訳実務、政策にも影響を及ぼしうるデータが産出される可能性はあるが、やはり音声言語の特徴をトランスクリプションにどう反映できるか、機械によるデータ処理がどれほどできるのかは、克服に時間がかかる課題だと考える。

12. Gile “Translation Studies as an object of empirical study; a tool for leaders and decision-makers”

通訳研究のリーダー的存在として知られてきた Gile だが、ここ数年は翻訳も含めた研究方法論、研究者の指導に焦点をおいた発表が多い。今回も、CETRA と EST (European Society for Translation Studies) の歴史とつながりを述べた後、実証的研究の定義やメリットについて論じた。以下、要約。「翻訳通訳研究が他分野においても引用されたり、実務の現場や社会との効率的な相互作用を図るためにも学術性を向上させていく必要がある。研究パラダイムとしては、研究者の直接的な知識をもとにイデオロ

ギーや他のバイアスが関わった「リベラルアーツパラダイム」と客観的データの分析をする「実証的研究パラダイム」がある。両者の是非を論じているのではない。相補的な関係が理想。既存の論文の引用文献分析をしてみると現在の研究方法の特徴や弱点が浮かび上がることもある。過度な一般化、主観性に基づく研究よりも、客観的なデータに基づく研究の方が意志決定者に対するインパクトもあるだろう。」実務家(特に通訳の場合)が研究方法論などの基礎訓練を受けないまま行った研究や他分野の概念や方法論を正しく理解しないまま行った研究の問題はこれまでも指摘されてきた。翻訳通訳研究コミュニティ全体の信憑性を高めるためにも、Gile が引き続き学生や若手の研究者に実証的研究の基礎知識と方法論を指導していくことは意義深い。複数の参加者が懸念を示した「リベラルアーツ対実証」という分断についてはこれからも議論が重ねられるのだろう。

13. Gambier “Une traductologie pour quelles pratiques translationnelles?”

フランス語による発表だったので、全てを聞き取れたわけではないが、英語による質疑応答を助けに理解した内容は以下の通り。「英語の影響力、経済性の追求、テクノロジーの発展によって翻訳の実践は変化している。実践と翻訳学との関係を考える上で、グローバル化した経済、イデオロギーなどの要因を考慮する必要がある。視聴覚翻訳では新しいタイプの翻訳が登場しており、用語の定義を標準化する必要がある。翻訳研究者は自分たちの研究の成果を関係者に効果的に伝達していかなければならない。翻訳の普遍的特性はコンテキストに照らして考えるべきで、あまりに抽象化されると意味を失ってしまうのではないか。学際性を重んじ、他分野の専門家との共同リサーチも進めるべきだ。翻訳研究の細分化は豊穡さを意味しているのか、それとも障害となっているのか。これは翻訳者教育にも影響を及ぼす。翻訳をめぐる問題に対して、専門家として翻訳研究者が問題解決法を提供できるような研究を進めるべきだ。」

二日間の議論を通して、繰り返し話題になったこと及び特に印象に残ったことを以下にまとめる。まず第一に、翻訳通訳学の発展を祝うことも大事だが、これからは他分野に対して影響力が持てるような学問を目指すべきだということ。具体的方策としては、翻訳通訳学の専門家以外の読者に届くような論文や書籍の出版方法を考える、他分野の専門家との共同研究を推進する、などがある。第二に、翻訳研究における細分化によって、多少の混乱が生じているということ。特に、用語や定義が統一されていないこと、様々な概念や理論間の議論ができていないのでそれぞれの関係性が不明確であるという問題は、翻訳通訳学のさらなる発展のために必ず解決すべきである。第三に、グローバル化とテクノロジーの進歩によって、翻訳通訳の新しい事象がでてきており、それらに目を向けるべきだということ。実務家や政策策定者などとの連携で、異文化間コミュニケーションの問題解決に寄与することによって、翻訳通訳学の意義も高まり発展もあるだろう。最後に、今回の会議には筆者の他、日本から 5 名の参加があり、世界中から集まった研究者たちとの交流が持てたことは意義があると思う。世界における翻訳通訳研究にも目を向けながら、日本のコンテキストでの翻訳通訳研究が行われているということを知らせることができ

たのではないか。今後は、日本の通訳通訳研究の発信力を高め、自分たちの研究成果を幅広く世界に伝えていくことが重要だと考える。

.....

【著者紹介】

武田珂代子 (TAKEDA Kayoko) モントレー国際大学 (MIIS) 通訳通訳言語教育大学院准教授。通訳・異文化間研究博士。著書に『東京裁判における通訳』、『Interpreting the Tokyo War Crimes Trial』(近刊)。